

### P-57 Multiple sleep latency test (MSLT) の結果を通した中枢性過眠症診断についての臨床検討

○岩下正幸<sup>1</sup> 佐藤 幹<sup>2,3</sup> 青木 亮<sup>3</sup> 原田大輔<sup>3</sup>

品川俊一郎<sup>3</sup> 大淵敬太<sup>3</sup> 小曾根基裕<sup>3</sup> 山寺 亘<sup>3,4</sup>  
須江洋成<sup>3,5</sup> 伊藤 洋<sup>3,4</sup> 中山和彦<sup>3</sup>

<sup>1</sup>西熊谷病院精神科, <sup>2</sup>新橋スリープ・メンタルクリニック, <sup>3</sup>東京慈恵会医科大学精神医学講座, <sup>4</sup>東京慈恵会医科大学葛飾医療センター精神神経科, <sup>5</sup>東京慈恵会医科大学中央検査部

【目的】中枢性過眠症の診断には、精神疾患による過眠症状や睡眠不足症候群などの鑑別が重要である。MSLTは日中の眠気の客観評価に有用であるが、MSLTの結果のみでは診断に難渋する例も多い。そこで我々は、我々の病院でMSLTを施行した患者の臨床症状と診断を調べ、統計分析を用いて、臨床診断のために有用な特性を検討した。

【方法】対象は、2009年～2010年の間に当院で中枢性過眠症の鑑別を要しMSLTを施行した94例(男性:43例(45.7%),女性51例(54.3%))、診断結果や臨床症状はカルテから後方視的に調べ、統計分析を行った。診断結果から、Narcolepsy with cataplexy, Narcolepsy without cataplexy, Idiopathic hypersomnia, Othersの4群に分けて検討した。

【結果】4群間での差を検定したところ、「発症年齢」「睡眠発作の有無」「睡眠麻痺の有無」などで群間での有意差が認められ、さらに回帰分析ではNarcolepsy群抽出には「short nap後の爽快感の有無」が、Others群抽出には「発症前後のストレスの有無」が、影響力が強いことが判明した。診断精度向上のため、より詳細な問診内容の吟味を要すると考えた。

### P-58 成人における愛着障害の心理療法

○武藤安澄<sup>1</sup> 辻内優子<sup>1</sup> 辻内琢也<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>ポレポレクリニック, <sup>2</sup>早稲田大学人間科学学術院

【目的】養育者からの不適切養育や被虐待体験の結果5歳以前から生じる過度な怖れと警戒, 社会的相互交流の乏しさ, 自他への攻撃性, 強いみじめさなどの症状を認める障害を, DSM-IV-TR およびICD10では反応性愛着障害と定義している。成人における愛着障害は上記の診断基準には存在しないが, 被虐待の成育歴をもち, 幼少期には上記のような症状を呈しながらも放置され, 成人に至りうつ病などの症状を主訴として医療機関を受診するケースが存在する。愛着障害が身体心理症状の背景に存在する場合, 患者は常に自己存在に不安を抱き自己評価が低くなることが推測される。本研究は, 成人の愛着障害に対して行った心理療法の効果についての後方視研究である。

【方法】2010年1月～2012年12月までの間に当院を受診した愛着障害と考えられる全ての成人を対象とした。対象者の年齢は22～52歳, 性別は男3名, 女17名であった。主診断は, 気分障害16名, 不安障害3名, 心身症1名であった。心理療法はカウンセリング, 認知療法, 行動療法といった意識レベルにアプローチするものと無意識にアプローチする箱庭療法の両方を行うことが望まれたが, ことばによって自尊感情を高められた5名と, 導入が困難だった3名には箱庭療法を行わずカウンセリングのみとした。ことばで表現が困難だった2名には箱庭療法のみを行った。効果判定は医師, 心理士における臨床観察で行った。

【結果】対象者20名中意識レベルと無意識レベルの両方にアプローチした10名は全員が改善し, 無意識レベルのみにアプローチした2名も改善した。意識レベルのみにアプローチした8名のうち3名は改善を認めなかった。

【結論】成人の愛着障害に対しては, カウンセリングなど意識レベルへのアプローチのほかに箱庭療法のように無意識にアプローチできる手法によって深層心理への心理療法が有効であると考えられた。